

押しに弱すぎる巨乳ちゃん、今日は毒舌マッサージ師に

「ただのマッサージですよ？」と騙され敗北♡

「花崎さん、俺言いましたよね？　あなたの肩こりは慢性化してるから、二週間に一度は通ってくださいって」

「は、はい……」

「なのに、前は予約ブッチでしたね？　お得意だからキャンセル料はもらいませんけど、普通なら全額払ってもらうところですよ」

「そ、その件は本当にすみませんでした……仕事が忙しくて……！」

「その件は？　俺の忠告を無視したことに申し訳ないという気持ちはないんですか？」

「心の底から申し訳ないと思っております……！」

通い慣れたマッサージ店へ赴くと、担当の相川さんにいきなり怒られてしまった。

相川さんは、三十三歳にしては少し童顔のイケメンである。仕事柄なのか、顔に似合わず体格がガッチリしている。加えて身長も高いも

んだから、真正面から叱られると少し威圧感があった。

普通にしていれば「少し歳の離れた友達」みたいな関係なので、余計に怖く感じてしまう。

（怒られるの嫌だから本当は来たくなかったけど、施術はピカイチだからなあ……）

私はいわゆる『巨乳』というやつである。

同性からは大いに羨ましがられるが、本人としてはデメリツトの方が多い。

肩こりに悩まされるし、服もブラジャーも好きなのを買えないし、男の人からはエッチな目でみられるし、あまつさえお誘いを受けることも、それに流されることもしばしばだ。……流されるのは私がチョロいからかもしれないけれど。

「だから『脳みそおっぱいに詰まってるのか』って言われるんです

よ」

「ひ、ひどい……確かに言われますけど、改めてちゃんと言わないでください……！」

顔良し・技術良しの相川さんに欠点があるとすれば、この毒舌だろう。

（しかも絶対わざと意地悪してる……！）

一度だけ、彼が他のお客さんに対応しているのを見たことがあった。「あれ？ 相川さんって双子だったのかな？」と思うくらい爽やかで優しい口調をしていたから、雷のような衝撃を受けた私である。

ただ、同時に「もしかして、私にだけ素で接客してる？」とも気づき、悪い気がしなかったのも事実だった。

（にしても、水を得た魚のように……いや私が悪いけどさ……）

「久しぶりなんですから、覚悟してくださいよ」

「うう……はい……」

（痛いのだなあ……）

もちろん、わざと痛いことをされるわけではない。でも彼は、私が「痛い痛い痛い！　これ以上腕上がりません！」と喚いても「そうですか。あと一センチいけますよね？」とギリギリを責めるのが非常に上手い人なのだ。

「じゃあ、今日はこれに着替えてください」

「？」

（これって……）

渡されたのは、薄っぺらい生地の塊だった。紐のようなものをつまんで持ち上げてみる。

どう見ても、白いビキニだった。

「……水着？」

「いいから」

「はいっ」

有無を言わせない圧に反射的に返事をした私は、そそさくと着替えスペースへ逃げ込んだのだった。



「あの……ちよつとこれ、恥ずかしいんですけど……」

相川さんに渡された布を纏い、胸を腕で隠しながら施術台に向かった。

白いビキニはやっぱりビキニで、なんならビキニよりも薄いから乳

首が透けてしまいそうなほどだった。こんな水着で海に行ってしまったら、たちまち注目の的だろう。いやそんな的にはなりたくないけど。

（サイズも合っていないから、ちよつと腕を動かすだけでおっぱいこぼれそうだし……!）

「今日はスペシャルコースなんで」

「スペシャルコース？」

「何度言っても自分の身体を大事にしようとしないうちに、身体を大事にするとはどういうことか分からせるコースです」

「あうう……」

チクチクすぎる言葉に何も言えなくなった。いつも通りに施術台に上り、うつ伏せになる。

「いえ、仰向けでお願いします」

「え？」

「オイルを使うので」

「お、オイル……」

（そんなのあつたんだ……。だからビキニ？）

今までは肩こりメインのコースだったからか、初めて聞く単語だった。

言われるがままに仰向けになる。

「身体を温める効果があるんです」

「へえ」

「垂らしますよ」

「んっ……っ……♡」

とろお……つとオイルが垂らされる。思いのほか温かい、大人びた匂いのするものだつた。

（し、しかも乳首にダイレクト……無意識？ あつたかいから変な声

出ちゃった……)

乳首を狙ったように垂らされたオイルは、私のおっぱいを伝ってとろん……と流れていく。何だか官能的な動きだった。

「じゃあ、まずはおっぱいから」

「へっ?」

(今、おっぱいって言った?)

毒舌で変に真面目な相川さんから「おっぱい」という単語が出てきたから驚いて声が出た。

なのに、相川さんは気にすることもなく私のおっぱいに熱い手のひらを乗せる。そして、ぬるうっ♡とオイルを広げるように動かすのだった。

「ひゃ……っ!?♡」

(ががががつつり触られてる……!!)

ぬるう……ッ♡　ぬるう……ッ♡

信じられない思いで固まっている私に、相川さんは慣れた手つきでおっぱいの下から持ち上げた。

こねるような動作を何度も繰り返し、オイルを広げていく。下から持ち上げられたおっぱいがたぶん♡と大袈裟に揺さぶられている様は、まるで遊ばれているようで羞恥心が膨らんだ。

「あ、相川さんっ……これ……っ♡」

「スペシャルコースですから」

（ス、スペシャルコースだからって……!）

オイルを入念に塗り込む相川さんの手は、どうしても私の乳首を擦った。

少し乾燥した手のひらでぬるぬると刺激されると、私の乳首は情けなくも徐々に硬くなっていってしまう。

（来るタイミング分かっちゃうから、なんか、ドキドキする……っ♡）

「んっ……♡」

「声、どうしたんですか？　ただのマッサージですよ」

「……ッ♡」

確認するように、あるいは揶揄われるように言われて、すぐ口を覆った。

（聞かれちゃったッ……♡　でも、いつも肩や背中しか触れない手がおっぱいを触ってるから……っ♡　しかも相川さんの手の皮膚、すごく固い……指でされるより刺激がっ……♡）

恥ずかしさと気持ちよさでいろんな思考が湧き上がる私に、相川さんはぼつりと言う。

「実際触ると、本当にすごい重さですね。肩こりがデフォルトになる

のも当然です」

「あ……、は、はい……っ♡」

「だから、隔週で来るように言ってたんですけどね」

ぴんっ♡

「あッ♡」

叱るような仕草で、相川さんの人差し指に乳首を弾かれる。

（は、弾かれちゃったっ♡ デコピンするみたい……っ♡）

すでに私の乳首は、オイルに濡れたビキニでは隠せないほどぷっくり♡と主張していた。手のひらの快感に甘んじていた肩が、ビクッ♡と大きく跳ね上がる。

「ビキニにテントが張られてますよ。ただのマッサージでどうしてこんなに勃ってるんですか？」

「あッ♡ やっ♡ んんッ♡♡」

ぴんっ♡　ぴんっ♡　ぴんっ♡　ぴんっ♡　ぴんっ♡

太くて長い指が、ビキニの上から何度も乳首を弾いていく。オイルで滑りがよくなっているから痛みはない。むしろ、狙い撃ちしてくる甘い刺激が快感になっていた。

（でも、マッサージで感じちゃってるなんて言えない……っ♡）

「だ、だってっ、相川さんの手が……っ♡」

「俺は仕事を全うしているだけです。乳首も凝ってるようなら、ほぐさないといけませんね」

「ひゃあッ♡♡」

くりゅくりゅくりゅくりゅっ♡

呆れたような目で私を見下ろす相川さんは、私の乳首を親指と人差し指でつまんだ。指同士を擦り合わせるように動かされて、自然と背中が反っていく。

「ああッ♡ やっ♡ 乳首こりゅこりゅ♡しないでえっ♡」

「オイルが効いてるみたいですね」

「えッ……?♡」

「このオイル、媚薬成分が入ってるんです」

「な……っ、あッ♡ んっ、は……ッ♡」

（び、媚薬って……エッチな気分になるやつのこと？ だから少し触られただけでこんな……っ♡）

「それとも、花崎さんが元からエッチだからこんなピンピン♡になっちゃってるんですかね？」

すりっ……♡ すりっ……♡

相川さんの人差し指が、今度は乳頭を優しく擦る。

まるで、母乳の出る穴がどこにあるか丁寧に探っているような、静かな指だ。そんな静かな指なのに、私の嬌声は溢れるばかりだ。静か

だからそこ、じっくり感じさせられている。

「あ……ッ、そ、そんなんっ♡　こと……っ♡」

「はは、もつとシてほしいって顔になってますよ」

「やっ……♡　違い、ッ、ますっ……んっ♡」

「じゃあ、しばらく続けますね」

「……ッ♡」

すりっ♡　すりっ♡　すりっ♡　すりっ♡　すりっ♡

貼り付けたような笑顔をする相川さんは、大きな指で繊細な動きを繰り返した。

（ピンピン♡になった乳首から落ちないように、優しく優しくすりすり♡すりすり♡されてる……ッ♡　もどかしくてジッと見ちゃうよう……っ、相川さんの視線も分かっているのにつ……♡）

相川さんの指の先に釘付けになっている私を、相川さんは緩く微笑

んだままジッと見ていた。私の反応が面白くて仕方が無い、そんな顔だった。

「っあ……っ♡ ん、んう……ッ、は……っ♡」

「そういうえば、新刊出ましたね。読みました?」

「えっ?♡ え、つとッ……んうっ♡」

いつも共通の話題として出される漫画の話であることはすぐに分かった。

けれど、もちろん私はそれどころではない。媚薬効果からか乳首がじんわり熱を持っていて、与えられる快感にいちいち敏感になっていた。

（すりすり♡されてるだけなのに気持ちよすぎて辛い……っ♡
もっとしてほしいのに……ッ♡）

「あのキャラがまた出てくるのは熱かったですね」

「あ……っ、は、はい……んッ♡」

「確かに死んだっていう描写はなかったですけど、まさか生きてるとは」

「んっ、ふ……っ♡ は、あッ……♡」

感想を言いながら、相川さんの指は次第に私の乳輪へ移動していった。

「つてなると、今度はあの伏線が活きてくると思ってた」などと話を続ける彼は、考え事をするようにくるくる♡くるくる♡と乳輪の周りをなぞる。

たったそれだけなのに、私の頭に浮かぶのはいやらしいことばかりだった。

（乳首触ってほしい……っ♡ 指でこりこり♡されたり、ぎゅむ♡って潰されたり、舌でちろちろ♡されたい……ッ♡♡）

「……って、俺は考えてるんですよ。花崎さんはどう思います？」

「えっ♡ あッ……♡ ツと、……っ♡」

（乳首触ってほしい♡♡ 乳首触ってほしい♡♡ 乳首触ってほしい♡♡♡）

漫画のことなんて考えられるわけではない。息が勝手に熱くなって、もうエッチなことしか考えられなかった。

「あのっ、あ……、相川さん……ッ♡」

「何ですか？」

「その、も、もうちょつと、ッ、強くっ……♡」

「ああ。こうですか？」

乳輪をなぞる指が、少しおっぱいに沈む。一瞬快感が走ったけれど、触られていない乳首が余計にジンジン♡と痛んで思わず泣きそうになった。

「ち、ちがくて……っ♡」

「どこですかね？」

（いつもは言わなくても察してくれるくせにいッ……♡）

明らかに愉しんでいる相川さんを涙目で見つめる。すると、相川さんは笑った。今日はやけに笑ってくれる。とても、意地悪な笑みだけだ。

「言ってほしかったんですけどね」

ぎゅむうッ♡♡

形を変えられるほど乳首をつままれ、肩が大きく震える。

「んああッ♡」

「イイ顔してたから触ってあげますよ」

「あっ♡ はあ……ッ、んっ♡」

ぐにっ♡ ぐにぐにっ♡

遠慮の無い強さで乳首が潰される。強弱をつけながら私の乳首を可愛がる相川さんは「気づいてます？」と、乳首の快感に喘ぐ私を見下ろした。

「今の花崎さん、すっごくエッチですよ。オイルまみれで、スケスケのビキニで、乳首はいやらしいほど腫れ上がって」

「やあッ♡ 言わないでえ……っ♡」

「マッサージでこんなにエッチな声出すの、花崎さんくらいですよ。反省してください」

「あッ♡♡」

ぐりゅうッ♡♡♡

乳首をひね上げられ、一際大きな声が出た。ぎゅうぎゅう♡と乳首をつねられ、可哀想なくらい潰されているのに痛さより快感が勝っていた。

快感に溺れながらも、なんとか反論する。

「で、でもこれっ♡ マッサージじゃ……っ♡」

「知らないんですか？ オイルマッサージ、流行ってるんですよ。あ、脳みそがおっぱいに詰まってるから。だからこんなにエッチな声出しちゃうんですよね？」

「んあッ♡ おっぱい虐めないでえっ♡」

ぐりぐりぐりぐりぐりッ♡♡

強い力で乳首をこねられ、快感を受け止めきれない腰が何度も跳ね上がった。

「腰がびくびくってなってますね。触ってほしいですか？」

相川さんの片手が乳首をぎゅむぎゅむ♡と潰し、もう一方が太ももを撫でてくる。

いやらしい手つきで撫でられるとやっぱ腰は震えて、お股を隠す

ように膝を合わせた。

「花崎さん、足を開きましようか」

動いた膝に気づいた相川さんは、私の膝を優しく撫でられながら普段の施術のときのようにそう言った。いつもの調子で言われると、自分でも驚くほど自然に足が開いてしまう。

(だ、ダメなのに……っ♡ こんなことしたら絶対おまんこ虐められるのに、相川さんに言われると従っちゃうッ……♡)

「上手です」

相川さんはいつもの口調を続けながらも私の太ももをねつとりと撫で、そのまま当然のようにおまんこまで進んでいった。到達したそこに少し触れると、彼は笑う。

「はは、びちよびちよ」

「……っ♡」

「オイル塗ったみたいになってますよ。おかしいですね？」

「だ、だつてえ……ッ♡」

「ただのマッサージなのに」

そう言うと、相川さんは「ここはリンパが集中してますからね」と足の付け根を触った。痛気持ちいいくらいの圧をかけられ、ぐっぐつとほぐされていく。

「ん……ッ」

（も、もしかして本当に、ただのマッサージなの……っ？）

相川さんの腕は確かだ。リンパをほぐす手は熟練されていて、確実に効いているように思えた。

……だと言うのに、私の意識はおまんこばかりに向いている。

（ああもう……っ♡ おまんこ切ないよう……っ♡ で、でも、だめだ……！ 乳首は負けちゃったけど、今度こそ我慢しなきゃ……！）

「花崎さん、最近運動してますか？　股関節のストレッチも追加した方がいいですよ」

「は、はい……！」

きちんと怒られながら、リンパマッサージが継続される。

トロトロ♡になってしまったおまんこは、相川さんの手が際どころに触れるたびにピクツ♡と反応した。

「ツ……♡」

（偶然なのかわざとなのか分からない手……っ♡　おまんこの入り口ギリギリまで来るから、子宮の中ジンジン♡しちゃうよう……っ♡　ただのマッサージなのにツ……♡♡）

「うん。ここはもつとちゃんとほぐした方がよさそうですね」

そう言った相川さんは、次の準備をするためなのか施術台に背を向けた。

（あ、危なかつた……またエツチな声出しちゃところだった……）

ひっそり一息つくけれど、その一息はすぐ「ひっ」という声に吸い込まれた。

相川さんが再びこちらを向くと、その手にはヴヴヴヴ……と震えるモノが掴まれていたからである。

「これを使っていきましよう」

どこからどう見ても、電マだ。

大人のオモチャというより、地味な色合いできちんとしたやつだ。故に、大きい。

「あ、相川さ……っ」

「はい、足閉じないで」

相川さんは施術台に乗ると、マッサージ師らしい掛け声と共に私の太ももを掴んだ。そのまま密着してきてがっちり私の逃げ場をなく

すと、ヴヴヴヴと震える電マを足の付け根に当ててくる。

「ひ、ああ……っ♡ んん……ッ♡ ちよっ……あう……ッ♡」

「しっかりほぐしていきましょねー」

（足の付け根にされてるだけなのに、おまんこまで震えて感じちゃう……っ♡ こ、こんな強いやつおまんこに当てられたらッ……っ♡）

まだ一度も触られていないのにぐちよぐちよ♡と愛液にまみれているおまんこは、電マの振動でしつかりと感じてしまっていた。妄想までしてしまう始末で、口から高い音の吐息が漏れる。

「んッ♡ ああっ……ッ♡」

「花崎さん、こりが浮き出てますよ？」

「あッ、んうっ♡ こ、こり……っ？♡」

電マを押しつけられている鼠径部に、目を向ける。

するとその矛先は、しとどに濡れたおまんこの少し上へと向けられ

ていた。

「ま、待って、そこは……ッ♡♡♡」

「このこり、なんですかね？」

「ひあああッ♡♡ クリだめえッ♡♡♡」

ヴヴヴヴヴ♡♡と唸って震える電マでクリトリスを刺激され、腰が浮き上がった。それでも電マはクリから離れず追いかけてくるから、申し訳程度に引かれたタオルを握りしめる。

「だめだめだめッ♡♡ クリに当てちゃっ♡ あッ♡ こんなのすぐイっちゃッ、んうッ♡♡」

「ぷっくり浮き出るほど硬くなってるんですから、ちゃんとほぐしてあげないと」

「やだやだやだあッ♡♡ イくッ♡ イっちやうからっ♡ 相川さ
んっ、やめてえッ♡♡」

「マッサージでいくんですか？　そんなの淫乱って言われてもおかしくないですよ。いいんですか？」

「ちがつ♡　お♡　だめッ♡　いくっ♡　あッ♡　いく、いくいくいく♡　ッあ~~~~♡♡♡」

容赦なく当てられた電マに、にべもなくイカされてしまった。私がビクビクウッ♡と腰が震えさせると、相川さんは呆れたような声で言う。

「マジで淫乱じゃないですか。やつぱりおっぱいだけじゃなくて中身もエッチなんですね、花崎さんは」

「はあ……ッ♡　は……っ♡」

「まだぷっくり♡腫れ上がってますね。もう少しほぐしましょうか」

「あっ……♡」

相川さんが、ビキニの紐をあっさりとほどく。なんの防御力もない

ビキニだったけど、羞恥心はあった。けれどそれもすぐ吹き飛ぶ。足を広げられ、おまんこを相川さんに晒すポーズを取らされたからだ。

「相川さ……っ」

「今度は舌で優しくほぐしますね」

（本編へ続く）